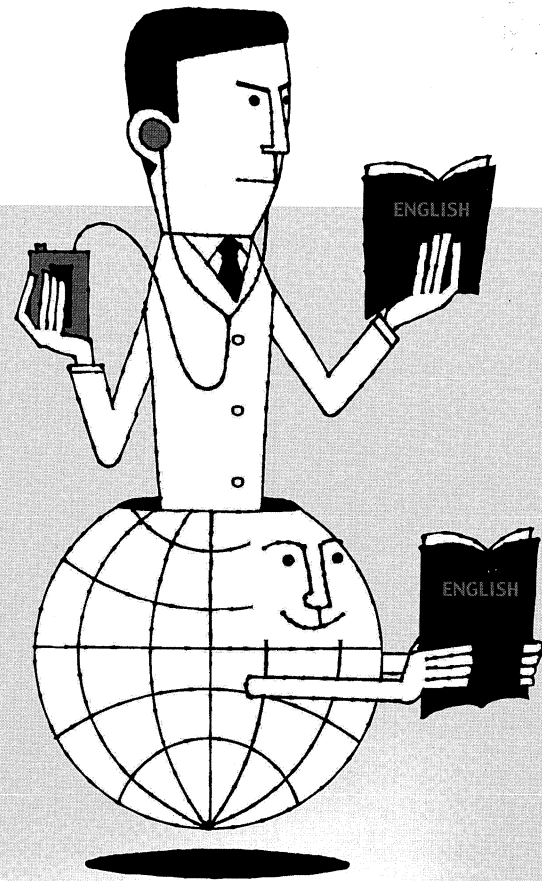


研究で使う言語

今回から始まる連載では、生物学を中心とする自然科学の研究という場について考えてみたい。具体的には、科学言語、科学雑誌、独学の方法、研究の進め方、学会や学界、社会との関係、研究者個人との関係、世界観の変革などについてである。本連載のタイトルは私のブログ名からとった。Sayerは私の英語でのニックネームである。

Illustration / Masaaki Hosoda



単一のラテン語から 多様な母国語へ

ルネサンス時代にヨーロッパで勃興した自然科学では、ローマ帝国が滅亡した後に欧州知識人の国際語となったラテン語で著作することが標準となっていた。ニュートンは17世紀に『自然哲学の数学的諸原理』を、リンネは18世紀に『自然の体系』をラテン語で著した。地の文がその後別の言語に変わっていても、固有名詞は簡単には変えられなかったため、現在でも生物の名称(学名)はラテン語なのである。

19世紀になると、民族自決主義にもとづく国民国家という考え方が普及し、欧州各国が独自性を主張した。それが自然科学にも影響して、ラテン語の使用がすたれていった。フランス革命の動乱を生き抜いたラマルクは、1809年に『動物哲学』をフランス語で著した。そのちょうど50年後に、ダーウィンは『種の起原』を母国語である英語で発表し、メンデルが1866年に発表した遺伝法則発見の論文にはドイツ語が使われている。このような言語の多様性に対応するために、日本の大学では第一外国語、第二外国語というよ

うに、複数の言語を履修し、かつては大学院の入試でも英語ともうひとつの言語を受験しなければならない大学が多かった。私が30年ほど前に大学院修士課程を受験したときはまだそうだった。当時必死にドイツ語の単語を覚えしたが、もう大部分忘れてしまった。

ふたたび英語という 単一言語へ

しかし、自然科学の場合、異なる言語を解する人々にも自分の研究成果を知ってほしいという気持ちが当然生じてくる。20世紀から21世紀に向かう

につれて、少なくとも生物学の世界は急速に英語帝国主義となった。最大の理由はアメリカとイギリスが生物学の世界で巨大な存在になったことだろう。アメリカという巨大な存在は、生物学だけでなく、あらゆる自然科学を覆っていった。さらに20世紀末に始まったインターネットの世界は、英語単一主義が強力に推し進められている。この状況のなかで、英語を母国語としない我々はどうすればよいのだろうか。

明快な処方箋のひとつは、英語をなるべく身につけることだ。私は大学に入学してすぐに留学したいと考えたこともあり、英語はいろいろな方法で習得につとめた。たとえば、成人のお祝いとして、両親にねだってタイプライターを買ってもらい、ブラインドタイピングを習得した。もちろん手動式のものであり、パソコンが普及した現在では見る影もない。4年間のアメリカ留学からもどってから20年以上経った現在の自分を考えると、論文はほとんど英語で書くし、私の研究室で毎週おこなっている発表会は質疑応答を含めてすべて英語を使っている。ま

た、私が勤務している国立遺伝学研究所では、所内のセミナーが数年前から徐々に英語化され、現在では9割以上の講演が英語である。

新しい世界共通語とは

しかしこれでいいのだろうか。自分のおかれている状況に常に違和感を抱くという、私の性格によるところがあるのかもしれないが、英語や米語を母国語とする研究者が、圧倒的に優位である現状はどうもいただけないという思いが、年をとるにつれて高まってきた。

そこで、自然科学で用いるのにふさわしい世界言語を開発し、その利用を推進するという発想が生じる。子どものころから、エスペラント語の存在を知っていたからかもしれない。1887年にポーランドのザメンホフが提唱したこの人工言語は、ラテン語に範をとっている。また東欧などの言語にみられる「^」を一部のアルファベットの上につけるなどする反面、Q, W, X, Yが存在せず、通常のタイプライターでは対応できない。「希望」という意味をもつこのエスペラント語は、結局広い支持が得られな

いま現在に至っている。

これを教訓とすれば、新しい世界語は現在広く使われている米語(アメリカ英語)を土台とするべきだろう。私はそのような視点から、10年ほど前にScientific English(科学英語)を提唱した。この名称そのものは、いろいろな定義で使われているようだが、私の提案した科学英語は、一般社会で使われている英語や米語を少し簡素化・合理化したものである。たとえば、これはすでにほとんどの論文でそうになっていると思うが、温度はアメリカで一般的な華氏ではなく摂氏を用いるし、重量はこれもアメリカで一般的なポンドではなくkgを用いる。このように、現在すでに自然科学で用いている言語は、一般に使われている米語とは少し異なっているのだ。私の提唱した科学英語ではさらに、冠詞(a, the)やラテン語由来の用法(et al.; e.g.; etc.)は使用しない一方、英米語以外の言語をもとにした新しい単語の使用を奨励している。将来は綴りと発音がなるべく近づく努力をすべきだと思っている。くわしくは<http://sayer-says.blogspot.com/>を参照されたい。

齋藤成也 (さいとう・なるや) 1957年福井県生まれ。1979年東京大学理学部生物学科人類学課程卒業、1986年テキサス大学ヒューストン校生物学医学大学院修士(Ph.D.)。1989年東京大学理学部助手、1991年国立遺伝学研究所助教、2002年同教授。総合研究大学院大学遺伝学専攻、東京大学大学院生物科学専攻教授を兼任。日本学術会議会員。専門分野はゲノム進化、人類進化。